

札幌市立北野小学校の取組【環境：地域・外部人材活用】

1 研究のねらい

本校から徒歩 10 分ほどの場所に、吉田川公園がある。吉田川とは、旧吉田農場の中を流れていたことから名付けられたもので、豊平区東月寒と清田区北野の境を流れ厚別川に注ぐ川である。この親水性河川の一部と、河岸段丘のコナラ林を利用している吉田川公園は、四季を問わず地域住民の憩いの場となっている。生活科やスキー学習等で利用する吉田川公園は、本校の子どもにとって、通いなれた場所である。また、3年生の総合的な学習の時間に、吉田川公園をの自然環境をテーマとして位置付けている。

本研究では、身近な自然環境に目を向け、地域の自然を大切にする子どもを育む取組を通して、専門的な知識や経験のある地域・外部人材等の活用と、その可能性を探ることをねらう。

2 取組内容

(1) 北野っこタイム「吉田川公園探検隊」

① 吉田川公園について知ろう

本実践では、3年生総合的な学習の時間「北野っこタイム」にて、「吉田川公園探検隊」をテーマの下、公園の魅力やその自然の観察、調査等を通して、子どもが自ら課題を見付け、主体的に問題を解決する学習の構築を目指した。

まず、吉田川公園を見に行く活動を設定し、子どもが、吉田川公園について調べたいことや、知りたいことを明らかにした。子どもは、公園が小さい子どもからお年寄りの方まで、幅広い年代に利用されていることや、たくさんの木や草、生き物がいることに気付いた。これらことから、吉田川公園が多くの人に利用されている秘密を探ろうと課題を設定し、調べ学習を開始した。



「どんな生き物がいるかな」

② 吉田川公園の生き物を調べよう

子どもは、課題を解決するために、公園を利用している方々に、「なぜ、吉田川公園を利用しているのか」「吉田川公園の好きな所はどこか」などの質問を行った。

子どもは、公園を利用している方々から、「自然の川で遊ぶことができる」「自然が豊かで気持ちがいい」という声をいただき、豊かな自然が公園の魅力であることに気付いた。そして子どもは、「公園の名前にもなっている吉田川を調べたい」という思いをもち、吉田川の生き物調べを行うこととした。3年生らしい課題設定ができ、「きっと、魚がいるはずだ」「見たことない生き物を見付けたい」と、吉田川への関心を高めていった。

(2) 水辺の生き物と植物の関係について知ろう

① 吉田川公園の達人と、川の生き物を探す

札幌市環境プラザ「環境教育リーダー制度」を活用して、派遣していただいた環境リーダーと一緒に、吉田川の生き物を観察した。子どもは、環境リーダーに見付けた生き物の名前や、その生態などについて質問して、教えてもらった。

身近な公園の川が、多様な生き物の生息域であることや、生き物の名前を専門家から教わることは、子どもにとって環境に興味をもつきっかけとなった。

② 吉田川の活動を、環境リーダーとまとめる

吉田川探検の後、吉田川ポスター作りを行った。ポスター作りが、子どもの主体的・対話的で深い学びとなるには、活動で得たことを働かせてポスター作りを行うことが重要である。環境リーダーが吉田川探検の後に、一緒にまとめや質問を行えるようにして下さった。子どもは、「吉田川公園は、たくさんの人が大事にしてきたきれいな川だということが分かった。ごみ拾いなどして大切にしていきたい。」という思いをもつことができた。地域・外部人材の活用は、子どもの豊かな体験を支えるだけでなく、そこから一人一人の主体的な学びにつなげるよう活用することが大切であることが見えた。



「吉田川は、すごいよ」

3 成果と課題

(1) 成果

地域・外部人材を活用して、活動中心の授業を構築することは、子どもの主体的な学びにつながった。また、子ども自ら設定した課題に基に、身近な公園に流れる川の生き物調査を行うことで、自然に対する気付きや、自然への関わり方などについて学ぶ活動となった。身近な川が、様々な人の力によってその環境が守られていることについて専門的な知識をもった方から学ぶことができた経験が、子どもの主体的な活動を引き出したと考える。さらに、子どもが調査・分析した結果等について地域・外部人材の方からアドバイスを受け、ポスター等に整理する活動から、自分が住む地域のよさや新たな課題についても見いだすきっかけとなった。

(2) 課題

環境教育は、複数の教科等と紐づく内容を含んでいる。特に身近な環境を教材とする場合、その環境を熟知している地域人材活用の有効性は明らかである。総合的な学習の時間に限らず、地域社会の人的資源を掘り起こすことも重要である。

また、外部人材の積極的活用は、専門的な知識、技能等を得る機会であると同時に、様々な立場の人との出会いを促し、社会的自立へのサポートや、将来の自分の生き方を広げる機会を子どもに与える一助になると考えられる。環境という広義な内容だからこそ、多様な地域・外部人材を活用し、教育課程の活性化（キャリア教育等）につなげる価値について改めて考える必要がある。